

ローゼンミュラー氏窩の形態学並びに組織学的研究

第 3 編

ローゼンミュラー氏窩の組織学的研究

岡山大学医学部耳鼻咽喉科教室 (主任: 高原滋夫教授)

金 滝 憲 次 郎

〔昭和33年9月3日受稿〕

1. 緒 言

既に第1編に於てロ氏窩の計測並びにその形態に就て述べ、第2編に於て鼻咽腔鏡検査に依るロ氏窩の形態学的所見に就て述べたが、本編に於ては更にロ氏窩のリンパ組織の遂令的比較を行い、尚且つロ氏窩リンパ組織の被膜の肥厚とリンパ組織肥大との関係につき併せて研究を行った。

2. 研究 方 法

耳疾患を有しない胎生10ヶ月の胎児、生後1日、生後2日の新産児、満1才、2年6ヶ月、4才、14才、26才、36才、43才、55才、56才の側頭骨並びに鼻咽腔を含む広範な標本を摘出し、型の如く固定、脱灰、包埋法を行い、右側を頭蓋の矢状面に一致する如く縦断し、左側を頭蓋の水平面に一致する如く横断し、25 μ の連続切片となし、ヘマトキシリン・エオジン二重染色を施したものに就て、ロ氏窩のリンパ組織を観察し、特にリンパ組織発達の遂令的経過を比較観察し、併せてロ氏窩内の橋架せる大なる癒着、囊腫の出現に注意を払った。

3. 研 究 成 績

胎生10ヶ月(第1, 第2図) ロ氏窩入口部では後壁に於ては上連合部より中央部迄リンパ組織が肥厚するにかかわらず、前壁に於てはリンパ組織が全体に薄く、前後壁共に弾力線維が著明に侵入し、数個の未熟なリンパ濾胞を認める。底部にやや近づくと前後壁共リンパ組織の肥厚を増し、数個の未熟なリンパ濾胞を認め、リンパ濾胞中を血管が貫通しているのが観られる。下連合部に於てはロ氏窩は深く、前壁中央部より後壁下連合部に橋架せる大なる皺壁

が認められた。

生後1日(第3, 4図) 入口部では後壁のリンパ組織がやや厚く未熟なリンパ濾胞を多数認め、前壁には殆んどリンパ組織は認められない。やや底部に近づくと前後壁共リンパ組織が肥厚し始め、前後壁に夫々1個の皺壁を観る。(第3図) 底部(第4図) ではロ氏窩は下連合部に於てのみ観られ、後壁中央部のリンパ組織肥厚し1個の皺壁を観る。

生後2日(第5, 6, 7図): 入口部(第5図) では前後壁共リンパ組織極めて薄く、後壁に未熟なリンパ濾胞が数個観られ、夫々の濾胞中を血管の貫いている所見が認められる。底部にやや近づくと(第6図) 後壁の上連合部より中央部にかけてリンパ組織の肥厚を増すが、前壁では依然リンパ組織は極めて薄い。底部(第7図) ではロ氏窩は下連合部に於てのみ観られ、前後壁共リンパ組織の厚さを塔す。

満1才(第8, 9図) 入口部では後壁中央部に厚いリンパ組織層があり、底部にやや近づくと依然後壁中央部のリンパ組織厚く、その中には初めて胚中心を有する完成したリンパ濾胞を少数観る。入口部より約2.8 mmの個所に粘液を含んだ小さい囊腫並びに漿粘液腺の出現を観た。

前述の胎生10ヶ月、生後1日、生後2日の標本を満1才の此の幼児の夫と比較すると、幼児では胎児及び新産児に較べてリンパ組織が甚しく肥厚し、小さい乍らも胚中心を有するリンパ濾胞があり(第9図) 且つリンパ組織外側の漿粘液腺が新産児では散在性に認められるに比し、幼児では極めて豊富にリンパ組織が深部に配列していた。

2年6ヶ月(第10図): 入口部では上連合部に厚いリンパ組織層があり、若干の結合線維の侵入を観、底部にやや近づくと上連合部のリンパ組織は厚さを減じ、中央部~下連合部のリンパ組織は厚さを

増す。底部では前後壁共リンパ組織が一様に殖え、特に下連合部に於て厚く、完成したリンパ濾胞の多数存在を窺ふ。ロ氏窩の諸所に粘液を含んだ小さな嚢腫を数個認める。

4才(第11図)・入口部より底部迄リンパ組織の発達著明で、入口部では前壁より後壁がリンパ組織厚く、底部に近づくると上連合部より下連合部の方がリンパ組織が厚い。入口部より底部迄大なる胚中心を有する濾胞を多数含み、入口部より約1mm, 約6mmの深さの2個所に嚢腫の出現を窺ふ。

以上の観察の如くロ氏窩内リンパ組織の発達は4才が最高で、2月6ヶ月、満1才の順序となり、リンパ濾胞の大きさ並びに数も亦4才、2年6ヶ月、満1才の順となつている。

14才(第12, 13, 14図) 入口部では後壁中央部のリンパ組織が厚く、前壁では全般にリンパ組織が薄い。底部にやや近づくると上連合部のリンパ組織が薄く、下連合部に行くに従つて厚くなる。リンパ組織の発育は全体として4才より悪く、胚中心を有するリンパ濾胞は小さい。(第12図)

ロ氏窩を取巻くリンパ組織の諸所に大小種々の嚢腫が窺られる。第13図は尚上連合部の水平面であるが、そこにはリンパ組織を蔽する大なる嚢腫が認められ、又第14図に示す如く同一標本に於て嚢腫の発生が腺排泄管に由来している所見を示すものも窺られた。

26才(第15図)：入口部より底部迄前後壁共一様にリンパ組織の発達を窺ふ、只入口部では後壁の方がやや厚く、底部に近づくると上連合部の方が厚くなり、小さなリンパ濾胞を多数認め、所に依りて大きなリンパ濾胞を散見するが、萎縮の為か多少形が崩れているのを認める。リンパ組織の発達は4才、2年6ヶ月、1才に劣り、リンパ濾胞の大きさは4才より小さく1才より大きい。

底部にやや近づいた所で後壁中央部より前壁上連合部に橋架せる大きな癒着を認める(第15図)ロ氏窩のリンパ組織の諸所に大小種々の数個の嚢腫が窺られた。

36才(第16図)：入口部では前後壁共リンパ組織薄く、萎縮した小さなリンパ濾胞を含み結合織線維の侵入が窺られる。底部にやや近づくると上下連合部のリンパ組織は入口部に比し前後壁共肥厚を増すのが窺られる。底部になると再びリンパ組織が薄くなるが、前2個所に比し萎縮したリンパ濾胞すら認められなくなる。此の所見を26才のそれと比較すると、

36才の例ではリンパ組織は全般に極めて薄くなり結合織線維の侵入が著しくなる。リンパ濾胞は全て萎縮して数も減り所に依つては消失したりする。

入口部より底部迄前後壁に大小多数の嚢腫の出現を窺っている。(第16図)

43才：ロ氏窩全体としてリンパ組織が頃に薄くなり、結合織線維の侵入が著しく、殊に入口部の前後壁に於て著明である。リンパ濾胞の数も減少し萎縮しているのを認める。

55才：入口部ではリンパ組織極めて薄く前壁が後壁より結合織化が著明である。底部にやや近づくると前後壁共下連合部のリンパ組織が稍々肥厚を増し、上連合部に行くに従つてリンパ組織が薄くなる所見が認められる。底部になると結合織線維の侵入は益々著明となり、著しく萎縮したリンパ濾胞を数個認める。入口部より底部迄大小数個の嚢腫が認められた。

56才(第17図)・入口部ではリンパ組織が極めて菲薄となり、前壁が後壁より結合織線維の侵入が著明に認められる。底部にやや近づくると萎縮リンパ濾胞があり依然結合織化著しく、底部ではロ氏窩は狭く浅くなつて閉鎖された所見を認め、下連合部に僅かのリンパ組織を窺ふ。尚入口部より底部迄リンパ組織内に多数の脂肪変性の個所を認める。耳管軟骨出現より2.5mm下方即ち上連合部の後壁上皮下に大嚢腫の出現を窺ふ、細胞成分を含まない多量の嚢腫液を含んでいるのを認めた。(第17図)

43才、55才、56才のリンパ組織を26才の夫と比較するとリンパ組織は極めて薄くなり、結合織線維の侵入は益々著明となり、リンパ濾胞は著しく萎縮している。56才では脂肪変性を多くの個所で認めている。

次にロ氏窩のリンパ組織の被膜に就て述べる。被膜は所に依りて厚く所に依りて薄く全然無い個所も散見されるが、幼児では一般に薄く年令の進むにつれて被膜は厚くなり、リンパ組織中に向つて結締織性隔壁を出し初める。ロ氏窩外被膜に向つても結締織性の枝を出しリンパ組織被膜との連絡が密となつてくる。

被膜の肥厚とリンパ組織の発達との関係を見ると、幼児ではリンパ組織軽度肥大のとき被膜の軽度肥厚、リンパ組織中等度並びに高度肥大のとき被膜の中等度肥厚が多く窺られる。成人ではリンパ組織の肥大の度にかかわらず被膜の中等度肥厚が多く窺われ、高年者では被膜の肥厚が幼児、成人より全体

として著明で、ロ氏窩外被膜とリンパ組織被膜との間の結締織に依る吻合が著明に観られ、吻合の個所が肥厚しているのを認める。

被膜肥厚の部位に就ては、幼小児に観られる被膜の軽度肥厚は前壁入口部、前壁中間部、底部の順に多く、被膜の中等度肥厚は後壁入口部、後壁中間部、底部の順に多く観られ、成人では被膜の中等度肥厚は各部位に観られた。老年者では前壁入口部の被膜は同部位のリンパ組織の薄いにもかかわらず甚しく肥厚していた。

4. 総括並びに考按

文献を渉猟するに咽頭扁桃に関する組織学的研究は多数見られるが、ロ氏窩のリンパ組織に就ての組織学的研究は微々たるものである。

ロ氏窩のリンパ組織の發育に關し記載せる田口(昭和11年)の報告に依れば、ロ氏窩のリンパ組織は10才から27才迄發育が良好で、思春期に於て最高の發育を示し、咽頭扁桃のリンパ組織も10才より26才迄の間が發育良好で、思春期に於て發育の頂点を示すと述べている。従つて彼の示説に依れば、ロ氏窩のリンパ組織と咽頭扁桃の夫の發育は略々並行的に進退するものと考えられる。凡てロ氏窩と咽頭扁桃の位置的關係は極めて近接し、その両者のリンパ組織が略々同様な發育過程を示すであろう事は容易に想像される處である。然して従来ロ氏窩リンパ組織の發育に關しては田口、米元の記載に止り、極めて寥寥たる處であるが、咽頭扁桃のリンパ組織の記載に關しては極めて多数の業績を見るので、余のロ氏窩リンパ組織の發育に關する研究成績を夫等咽頭扁桃のリンパ組織の研究成績と對比して、ロ氏窩のリンパ組織の發育退縮に關して考按を進めたい。

胎児及び新産児の咽頭扁桃に關して Hellmann は、咽頭扁桃は胎生4ヶ月で現われ次第に粘膜の細胞浸潤が増して新産児になるとリンパ組織が完全に形成され、襞や溝が明瞭に出現し、且つ胚中心は出産後僅かの間に見られるとしている。Bickel に依れば胎生期には咽頭天蓋の粘膜の襞が著明、且つ広範であるが、生後1ヶ年の間に咽頭より耳管に亘る扁桃のみが襞をもつたリンパ組織として残る様になると記載している。Hollender & Szanto (1945) 等の説に依れば鼻咽腔リンパ組織の發育は生後直ぐ始まると言つている。

余のロ氏窩の組織学的検索に於ても、胎児及び新産児のロ氏窩内に1~2個の襞や溝を明かに観察し

てをり、そのリンパ濾胞中に未だ胚中心を認めていないことは、多数の襞を有し且つ未熟乍らも胚中心を有する幼児のロ氏窩と比較すると、胎児及び新産児のリンパ組織は未だ發育の段階にあるものと考えられる。

次に幼年者及び年長児に於て咽頭扁桃の最も良く發達する年齢は Kayser (1899) に依れば5~11才、Symington (1910) に依れば6~7才と述べているが、余のロ氏窩の研究に於ては4才のリンパ組織に最高の發育が認められ、略々4~5才がロ氏窩のリンパ組織の最も良く發達している年齢ではないかと推測される。

次に咽頭扁桃の退縮の時期に關しては、Disse (1896), Görke (1904), Serebyakoff (1906), Wilson (1906), Symington (1910), Jolly (1923) 等は思春期をもつてその時期であるといつている。余のロ氏窩の組織学的検索では14才のリンパ組織の發育が4才より劣つているのみならず、14才では既にロ氏窩リンパ組織の退行が認められているので、退行の時期は尠くとも14才よりもう少し早く始まるのではないかと推測される。

次にロ氏窩リンパ組織の發育と密接な關係にある濾胞の数並びに大きさ、胚中心の形成時期、更にリンパ組織の脂肪變性に就ての検索成績に触れ度い。

田口に依ればロ氏窩のリンパ濾胞の数は20才代に於て頂点に達し、リンパ濾胞の大きさは数と並行の關係を保つと述べているが、余のロ氏窩の検索では4才に於てリンパ濾胞が最も大きく、数も最も多く、4才、2年6ヶ月、14才、26才、満1才の順に数並びに大きさを減じて居り、26才になるとリンパ濾胞が萎縮消失し初め、36才になると萎縮リンパ濾胞を数個残すのみとなり、55~56才になると殆ど萎縮リンパ濾胞すら認められない迄に至る。

胚中心の形成時期に關しては Kniaschetzky (1899) は咽頭扁桃に於ては生後6ヶ月、Barnes は生後4~6ヶ月、Pol (1923) は生後3ヶ月より以前には認められないと述べて居り、Görke (1904) に依れば胚中心の發育は咽頭のリンパ組織の發育と並行すると記載しているが、余のロ氏窩の検索では満1才になつて始めて胚中心を認め、胚中心の数は4才、2年6ヶ月、満1才の順序となつて居る。

Görke (1904) は老年者の咽頭扁桃では脂肪變性が見られると述べているが、余のロ氏窩の検索成績では56才の標本に退行變性と考えられる脂肪細胞の出現を認めている。

以上の諸点と余の成績とを勘案し、余はロ氏窩のリンパ組織は4才を頂点として發育の最高を示し、思春期以前に退行変性に移り、その状態は文献に見られる咽頭扁桃の發育退縮関係と並行関係を示すものとする。

次にリンパ組織の退行現象と多少の関係を持つリンパ組織の被膜とロ氏窩内囊腫との関係に就いて余の検索標本に於ける所見から之を総括記載する。

咽頭扁桃のリンパ組織の被膜並びに結合組織に就ては Hellmann, Goodale の記載があるが、Goodale (1902) に依れば高年者の咽頭扁桃ではリンパ組織の消失と同時に結合組織の増加がおこり、枝状に一樣に対称的に基底から表面に向つて拡つていと述べている。余のロ氏窩リンパ組織の検査成績では36才より結合組織のリンパ組織内への侵入を認め、年齢の増加と共に結合組織化高度となり、前壁入口部に著明である。

ロ氏窩の囊腫に就ては Hellmann (1927), Glas (1929), Eigler (1940) が触れ、米元 (1952) はロ氏窩を閉塞する程の大なる囊腫を報告し、田口は囊腫は10才から現われると述べているが、余の検査成績では夙くも満1才、2年6ヶ月、4才の幼年者に於て粘液を含む小なる囊腫を認めるものもある。14才以上のものに見られた囊腫は一般的に大きく又多発性のものもあつた。然も14才の例では第14図に見る如く囊腫が腺排泄管の拡大に由来している所見を示していた。

以上述べた通り満1才、2年6ヶ月、4才、14才に認められる如きリンパ組織の充満、26才の例に見られた前後壁に橋架せる癒着、殆どの症例に認められた如き囊腫、はその程度が著しい場合には、耳管の生理的開大に必要な耳管隆起の後上方運動を障碍し、耳管狭窄症の成因になるのではないかと推測される。

5. 結 語

1. 胎児及び新産児ではロ氏窩は未だ形成に至ら

ない。ロ氏窩に該当する部に1~2個の皺壁を觀察し、顕微鏡的に見るとリンパ濾胞はあるが、未だ胚中心を認めるに至らない。

2. ロ氏窩のリンパ組織の遂令的变化を比較觀察すると、リンパ組織最高の發育は4才前後で、退行の時期は14才以前で、2年6ヶ月~26才がリンパ組織の良い發育をなしている年齢と考えられる。

3. ロ氏窩のリンパ濾胞は4才が最も大きく数も多い。大きさ及び数は4才、2年6ヶ月、14才、26才、満1才の順となり、26才になるとリンパ濾胞が部位に依り萎縮し初め、36才になると萎縮リンパ濾胞を数個残すのみとなり、55才以上になると殆ど見られなくなる。

4. 胚中心形成の時期は満1才になつて始めて認められ、胚中心の發育はリンパ組織の發育に並行することが認められた。

5. 高年者になると結合組織のロ氏窩リンパ組織内への侵入が著明となり、結合組織の増加はリンパ組織の隔壁に沿うて枝状に現われ、殊にロ氏窩の前壁入口部に著明に見られた。

6. 満1才、2年6ヶ月、4才の幼児のロ氏窩内に於ても粘液を含む小なる囊腫が認められた。14才以上の年長児、高年者では大なる潜溜囊腫、多発性囊腫の出現を認め、その中には腺排泄管の拡大に由来している所見を呈したものがあつた。

7. 幼児に認められるリンパ組織の充満、年長児に認められる大なる癒着、殆どどの症例に認められた囊腫はその程度が著しい場合には耳管の生理的開大に必要な耳管隆起の後上方運動を障碍し、耳管狭窄症の成因になるものと推測する。

稿を終るに臨み終始御指導御校閲を賜つた恩師高原教授並びに御助言を賜つた解剖学教室関教授、標本を提供せられた病理学教室田部、浜崎両教授、国立岡山病院木田産婦人科医長の御好意に深謝する。

文 献

- 1) 高原滋夫：日本耳鼻全書，第1巻第3冊，昭28.
- 2) 高原滋夫 宿題報告別刷，昭26.
- 3) 高原滋夫：耳鼻咽喉科，24巻，13号，昭27.
- 4) 米元重雄：岡山医誌，63年別巻4号，昭27.
- 5) 田口豊藏：日本病理誌，26巻，289頁，昭11.
- 6) 大野章三：日本耳鼻全書，2巻，483頁，昭8.
- 7) Braislin, W. C. : Ann. of Otolaryngol., 19, 36, 1910.
- 8) Bryant, W. S. : Arch. f. Ohrenheilk., 74, 41, 1907.
- 9) Bryant, W. S. : Med. Rec., 71, 931, 1907.
- 10) Brunk, T. L. : Laryngoscope, 16, 647, 1906.
- 11) Brill, R. : Ann. of Otolaryngol., 63, 164, 1954.

- 12) Eigler : Arch. f. O.-N.-K. HK., **147**, 365, 1940.
- 13) Eggston, A. A. and Wolff, D. : *Histopathology of the Ear, Nose and Throat*, 1947.
- 14) Gräff, S. : *Ztschr. f. Hals usw. Hk.*, **31**, 484, 1932.
- 15) Guggenheim, P. : *Arch. of Otolaryngol.*, **55**, 146, 1952.
- 16) Graves, G. O. and Edwards, L. F. : *Arch. of Otolaryngol.*, **39**, 359, 1944.
- 17) Glas : *Monatschr. f. Ohrenheilk.*, **63**, 1216, 1929.
- 18) Görke : *Arch. f. Laryngol.*, **12**, 278, 1902.
- 19) Hollender, A. R. and Szanto P. B. : *Arch. of Otolaryngol.*, **41**, 291, 1945.
- 20) Holmes, E. M. : *Ann. of Otolaryngol.*, **20**, 29, 1911.
- 21) Hellmann, T. : *Handbuch d. mikroskopischen Anatomie d. Menschen V/1*, 264, 1927.
- 22) Lion, H. : *Arch. of Otolaryngol.*, **51**, 655, 1950.
- 23) Luschka, H. : *Arch. f. mikroskop. Anatomie*, **4**, 1, 1868.
- 24) Politzer, A. : *Geschichte der Ohrenheilkunde*, 1907.
- 25) Wood, J. W. : *Journal of L. R. O.*, **28**, 568, 1913.
- 26) Zaufaul : *Arch. f. Ohrenheilk.*, **9**, 133, 1875.
- 27) Zuckerkandl : *Arch. f. Ohrenheilk.*, **10**, 261, 1876.
- 28) Tolcynski : *E, E, N, & Thr. monthly*, **34**, 816, 1955.

Morphological and Histological Studies on Rosenmüller's Fossa

Part 3. The Histological Study on Rosenmüller's Fossa

By

Kenjiro KANATAKI

Department of Oto-Rhino-Laryngology, Okayama University Medical School
(Director: Prof. Shigeo Takahara)

Comparative histological observations were carried out on lymphoid tissue of Rosenmüller's fossa in the order of ages, and also the relationship between the thickening of the capsule of lymphoid tissue in R. Fossa and the hypertrophy of lymphoid tissues was studied.

The maximum development of lymphoid tissues is reached at the age of four, and the size and number of lymph follicles are also greatest at four, and both the size and number decrease progressively in the order of 2 years and six months, 14 years old, 25 years, and one full year old. In older children and adults some show large retention cysts and multiple cysts; and certain ones clearly indicate that these malformations are caused by the dilatation of the excretory duct of lymphatic glands. Moreover, there are some revealing big adhesions bridging across the anterior and posterior walls of R. fossa.

It is believed that the hypertrophy of lymphoid tissues in R. Fossa, big adhesions and formation of cysts as observed in adults impede the backward and upward movement of Torus tubaris and these constitute the cause of tubal stenosis.

金 滝 論 文 附 図

第 1 図



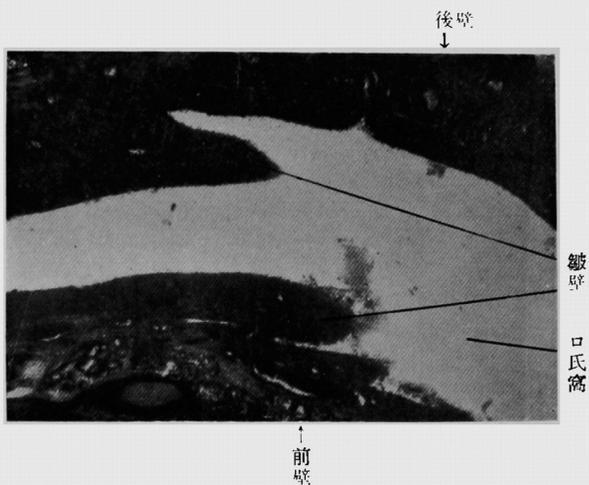
胎生10ヶ月の頭蓋矢状面・ロ氏窩底部が下連合部に於て深い所見を呈する。

第 2 図



胎生10ヶ月の頭蓋矢状面・ロ氏窩底部で前壁中央部より後壁下連合部に橋架せる皺壁が視られる。

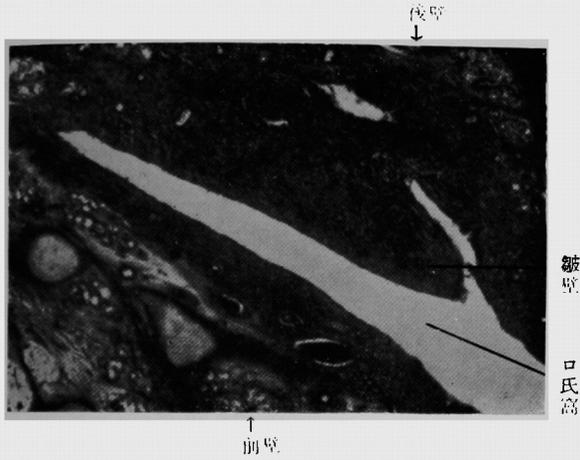
第 3 図



生後1日の頭蓋矢状面・ロ氏窩の底部にやや近づいた所では前後壁に夫々1個の皺壁が視られる。

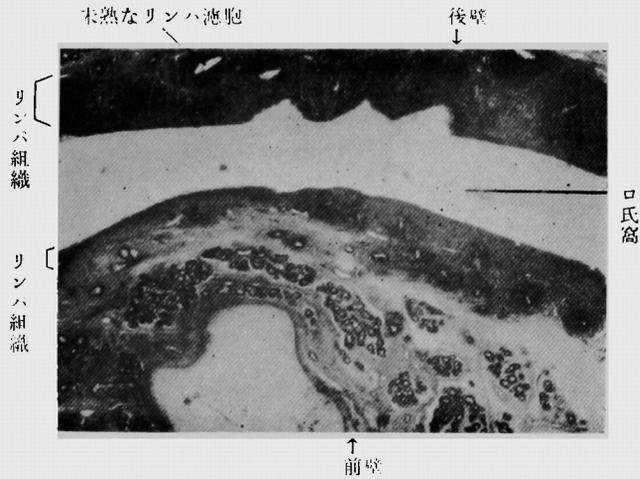
金滝論文附图

第 4 図



生後1日の如蓋矢状面(底部)・ロ氏窩底部は下連舌部に於てのみ観られ後壁中央部リンパ組織肥厚し1個の皺壁が観られる。

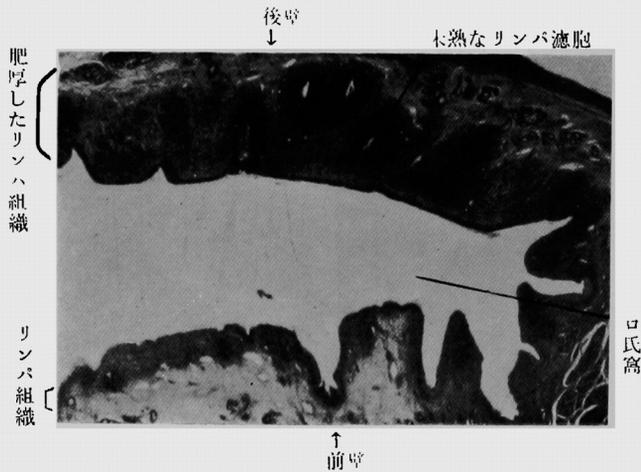
第 5 図



生後2日の如蓋矢状面(入口部)・ロ氏窩の前後壁共リンパ組織薄く、後壁に肛中心をもたぬ未熟なリンパ濾胞が観られる。

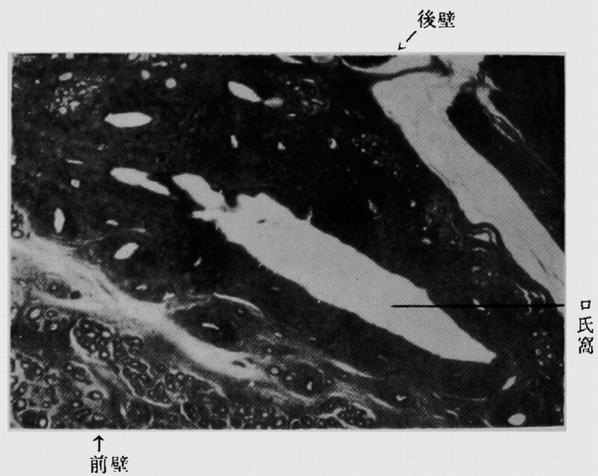
金 滝 論 文 附 図

第 6 図



生後2日の頭蓋矢状面・ロ氏窩の底部にやや近づくると後壁中央部のリンパ組織厚く，前壁全般にリンパ組織の薄いのが視られる。

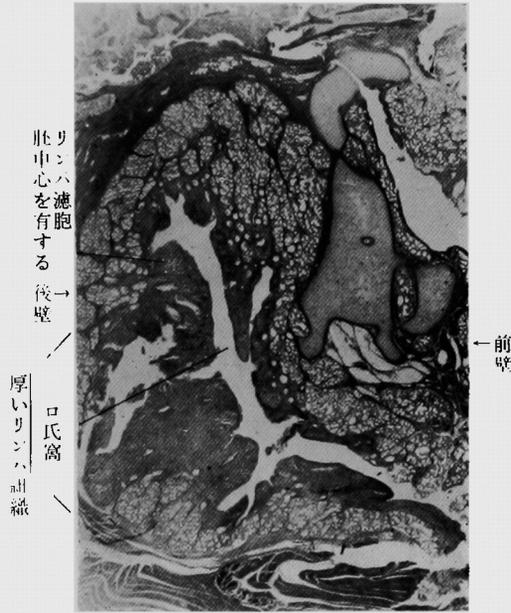
第 7 図



生後2日の頭蓋矢状面(底部)・ロ氏窩の底部は下連合部に於てのみ視られ，前後壁共リンパ組織の肥厚が視られる。

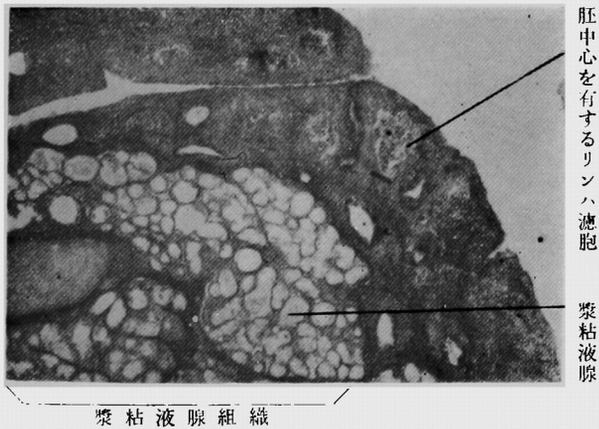
金滝論文附图

第 8 図



満1才の頭蓋矢状面・

第 9 図



満1才の頭蓋矢状面・リンパ組織肥厚し、胚中心を有するリンパ濾胞、豊富な漿粘液腺の組織が視られる。

金 滝 論 文 附 図

第 10 図

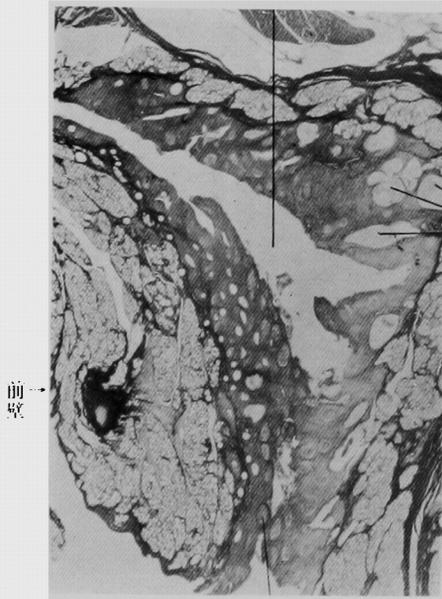
リンパ濾胞 ロ氏窩



2年6ヶ月の頭蓋矢状面(底部)・リンパ組織前後壁共肥厚し、完成したリンパ濾胞の多数存在を認る。

第 12 図

ロ氏窩



リンパ濾胞

14才の頭蓋矢状面(底部)・

第 11 図

大なる胚中心を有するリンパ濾胞

ロ氏窩

後壁



4才の頭蓋矢状面・

第 13 図

ロ氏窩



14才の頭蓋水平面(上連合部)・大なる嚢腫を認め、内にリンパ組織をもつ。

金 滝 論 文 附 図

第 14 図

ロ氏窩

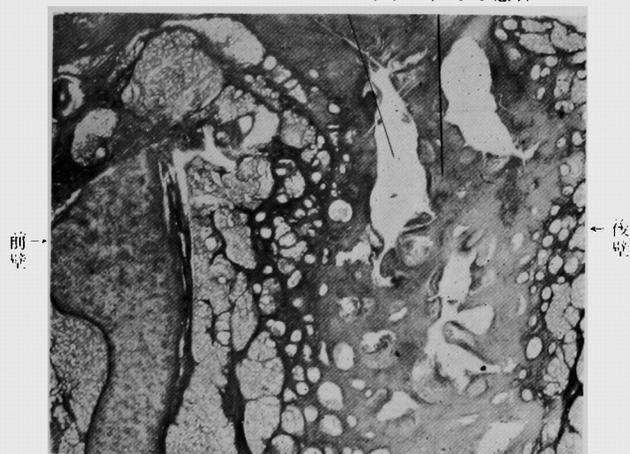


腺排泄管

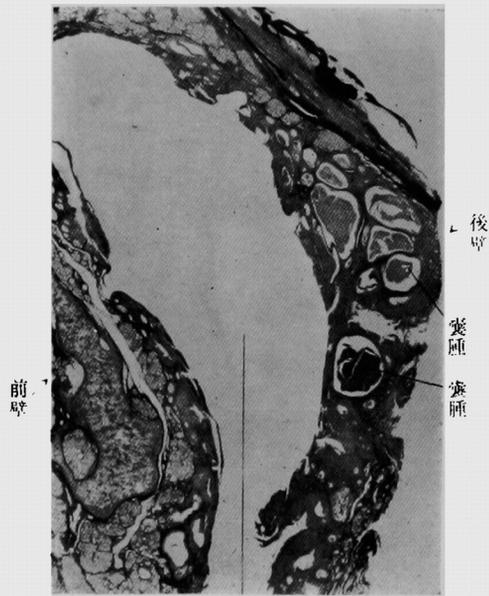
14才の頭蓋水平面・囊腫の発生が腺排泄管に由来している所見を示す。

第 15 図

ロ氏窩 大なる癒着



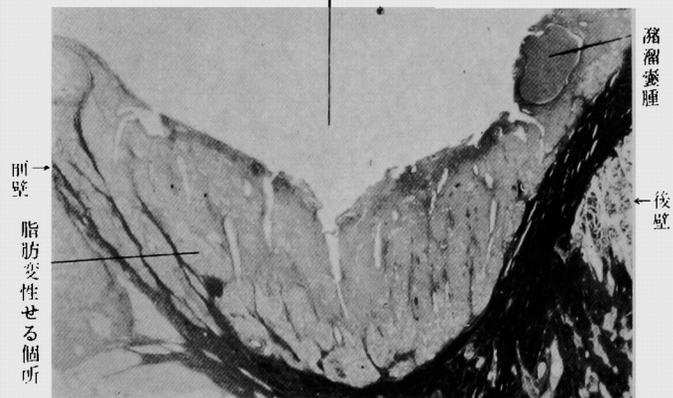
26才の頭蓋矢状面(底部)・後壁中央部より前壁上連合部に橋架せる大なる癒着が視られる。



ロ氏窩

36才の頭蓋矢状面(入口部)・ロ氏窩の多発性囊腫が入口部より底部迄諸所に視られる。

ロ氏窩



56才の頭蓋水平面・ロ氏窩後壁中央部に大なる潑溜囊腫が視られ、多数の脂肪変性せる箇所が視られる。